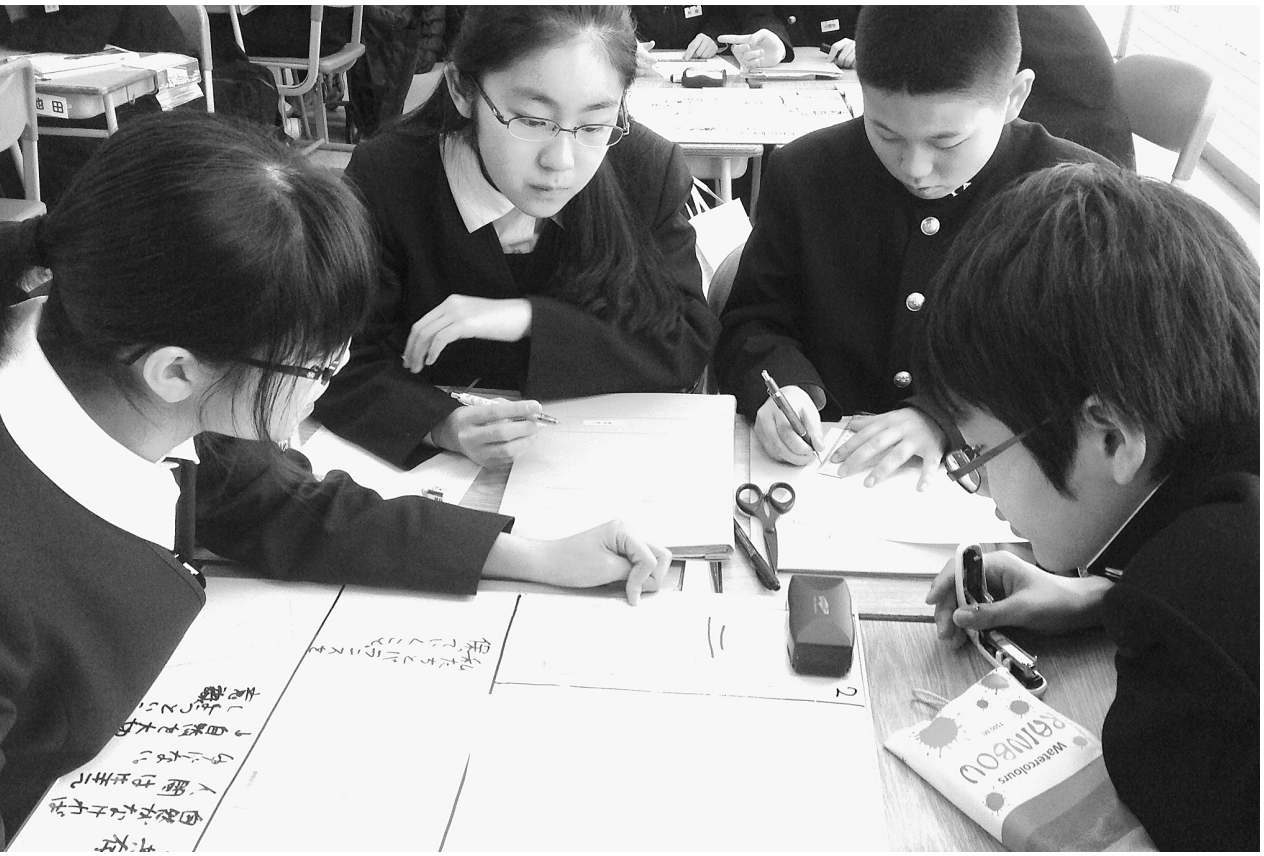


言葉の力を高め伝え合う喜びを知る

国語科

新井　拓　・　鈴木　真之介

Ⅰ　はじめに

平成28年12月21日に示された中央教育審議会の答申では、「教科等を越えた全ての学習の基盤として育まれ活用される資質・ 能力」として「言語能力の育成」の重要性が示されている。また、新学習指導要領の総則においては、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」に向けて「言語能力の育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて、生徒の言語活動を充実すること」が求められている。翻って、国語科の特質として、「言葉による見方・考え方」として「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」が示された。

以上のことから、国語科では教科として言葉の力を高めることを目指すのはもちろんのこと、他教科の学びを支えるための資質・能力となる言語能力の育成も重視しなくてはならないことがわかる。また、「自律」と「共栄」に向かう学びにおいては、様々な場面で言葉を用いて思考・判断・表現することが求められる。そうした学びを通して、言葉の力は一層磨かれることとなる。生徒が言葉の大切さを認識し、思いを伝え合うための力を磨くことができる授業を積み重ね、自分や仲間の未来を切り拓いていくための言葉の力を高めるとともに、その力が全ての教科で取り組まれる「自律」と「共栄」に向かう学びにつながることを目指す。

Ⅱ　教科研究内容

1　国語科における「自律」と「共栄」に向かう学び

国語科では、目の前にある文章や他者の考え、経験などをいかに言葉で理解していくか、あるいはどのように表現していくかという過程や、その中で使用される言葉自体を学びの対象としている。そこでは、対象となる言葉をより正確に理解し、より適切に伝えるために、言葉の意味や価値に対する不断の問い直しが行われる。問い直していく過程の中で、対象となる言葉を能動的に捉え直しながら自分の思いや考えを深めること、それを表現することによって互いによりよく分かり合おうと努めること、そのために必要となる言語能力を高めていくことが国語科における目指すべき学びということができる。

互いによりよく理解し合おうとするとき、他者は欠かすことのできない存在となる。それは、自らの思いや考えを伝える対象としての存在に留まらず、自らの学びを互いに深化させ合うという意味合いでの存在である。そうした他者の存在に対して学習者が自覚的になるような学習活動を展開する。まず、学習者が「他者の考えを知りたい」「自分の考え伝えたい」と思えるような実の場につながる課題を設定する。次に目標や活動のゴールを共有し、目指すべき方向性を見いだす。続いて課題解決のために、これまでの既習事項を想起し、どのような方法でよりよく理解したり表現したりできるかを考える。そして、実際にテクスト（情報）を選択したり、比較・分類・関連づけたりしながら、課題解決を図る。そうした過程において、適宜互いに説明し合う場面を設定する。その際には、それぞれの考えが明確になるように、思考を可視化するなどの工夫をする。また、相互評価なども取り入れ、交わし合う言葉の中で新たな視点に気付いたり、考えを広げたり深めたりしながら学びを進める。そして、様々な場面・形態における他者との関わりから自らの学びの過程を吟味し、自分の解釈の妥当性を検証したり、必要に応じて新たな視点からの読み方を加えるなどの修正を図ったりすることで次の学びへと生かしていくことにつなげる。

つまり、国語科における「自律」と「共栄」に向かう学びとは、他者の存在を生かし合いながら、自ら課題を解決することで言葉の力を磨き、更にはその過程に対して自覚的になることで、個の力のみでは到達できない言葉そのものに対する理解や言葉を用いて思考・判断・表現する力を獲得することを目指す学びを意味する。このような学びの積み重ねにより、国語科で目指すべき姿に迫るとともに、「自己を拓き、協創する生徒」の育成に寄与していくものと考える。

2　「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

１年次は「自律」に向かう視点の手立てと「共栄」に向かう視点の手立てに分け、学習展開におけるそれぞれの場面に応じて手立てを示したため、学びの過程に対する知の獲得が不明確だった。そこで、２年次の重点である「省察」を活用した展開を取り入れ、これまでの手立てを修正したり、新たな視点を加えたりして、以下の二つの手立てとして整理・再構築を図った。

⑴　既習事項を活用し、多様な情報を比較・関連付け、相互交流を通して自己評価を行う学習活動の展開

課題を解決し目標を達成するために様々な可能性を吟味したり、多様な考えに触れたりすることは、言葉への深い理解や豊かな表現につながる。ただし、無計画に可能性の幅を広げるのではなく、これまでに学習してきた、よりよく理解したり表現したりできる方法を既習事項として活用し、新たに出会う情報を比較・関連付けることで、試行錯誤を重ねながらより有効な方法を選択、検証することが可能になると考える。必要に応じて比較すべき情報を求める、自分の経験と重ねるなど、生徒が能動的に情報と向き合う姿を求めていきたい。

また、自分の考えの妥当性を検討し、解決に向けた方法や考え方にどれだけの有効性があるかについて互いの考えを可視化しながら交流することで、他者の学びとの相互作用が生まれる。「他者のために」という視点をもって助言を行ったり、新たな発見を別の他者に伝えたりすることを通して、互いに支え合う集団による学びを形成していく。

更に、これら「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てをより深化させるため、自分が選択した方法やその有効性、達成度などに対して、ワークシートなど用いて評価を促す学習展開を設定することで、これまでの学びを俯瞰し、必要に応じて再検討を図る契機として機能させ、次の学びを明確にしていく。授業の様々な場面で、あるいは題材の終末などでこのような「省察」を活用し、自らの選択の有効性やその結果から得られた成果に対して客観的に把握したり、他者との関わりがどのように自分を高めたかを自覚したりすることが、次の学びへと結びつける力を生むと考える。学習活動の中で思考・表現する過程を通して得られた知識や技能は何かを再確認するだけではなく、それらがどのようにして得られてきたかという視点も重視しながら、抽象度と汎用性を高めることを通して、生徒自ら主体的に日常生活や他教科での学びに生かそうとする意欲へとつなげたい。

⑵　明確な到達点を共有し語り合うことを通して、自己の考えを確立し深化させる学習活動の展開

言葉を用いて対象を理解したり自己の考えを形成したりすることは、基本的に個の内在的な活動となる。ときには、メモを取ったり、ワークシートに整理したりすることもあるが、それを自覚的・日常的に行う生徒は多くはない。その結果、それぞれの思考を見取ることが、学習者にとっても授業者にとっても曖昧になりがちである。そこで、互いの考えの形成や深化を目的に、理解したことや考えたことを語り合う場面を設定する。語り合うことには、二つの側面からの効果が期待できる。一つ目は、他者に伝えるために、自らの理解や考えについて自覚的になれることである。例えば、文章を理解するときなどにおいて、読んだときには理解したつもりでも、その内容を他者に伝えようとしたときに、自分の理解が不十分であったことに気付くことがある。そうした理解の不足に自ら気付き、それを埋めるために、これまで学んだ文章の読み方を選択しながら文章を読み直すことが、文章をより正確に捉えることにつながると考える。二つ目は、語り合うことでそれぞれの考えが表出され、互いにアドバイスしあい、それぞれの良さを取り入れることが可能になることである。自己に閉じられていた思考を他者に開き、それによって自らの考えが広がったり深まったりする経験を重ねることで、他者の存在が自己の学びに寄与することや、自己の学びが他者の学びを支えていることに気付かせたい。

もちろん、場面を設定するだけでは大きな効果は期待できない。学びの相互作用を生むためにも、生徒が見通しをもって学べるように、明確な到達点を共有する必要がある。更には語り合うための手段も必要となる。そこで、題材の導入では、学習者の興味関心を高め、皆で取り組んでみたいと思える学習

課題や言語活動を設定したい。そして、その課題や活動に対する自分の考えを可視化するための方法を提示する。例えば、説明的文章を読む際には、本文に関わる興味深い映像資料を提示したり、本文をまとめるための方法としてマトリクスやベン図などの思考ツールを紹介したりするといった方法が考えられる。そうすることで、生徒自らが理解や表現の仕方を選択することを促すことができる。

更に、語り合う場面やその結果を自ら振り返る際に、「省察」を活用する。互いに語り合う場面では、自分は何を根拠にしてそのように考えたのかを振り返る機会を設ける。また、成果を振り返る際には、そこに至るまでの過程や、語り合うことにおける他者の存在に意識が向くように、自分の理解に他者の存在がどう生かされたかといった観点を設定する。同じ課題を解決することを目指す他者と語り合うことが、自らの理解の深化につながることを実感として積み重ねていくことで、日々の学びへの転化につなげていきたい。

Ⅲ　実践例

実践例１

１　題材名　　「少年の日の思い出」光村図書１年

２　題材のねらい

①　場面の展開に沿って、登場人物の心情の変化を捉え、作品を読み深める。

②　登場人物の考え方や感じ方、表現の特徴などについて、自分の考えをもつ。

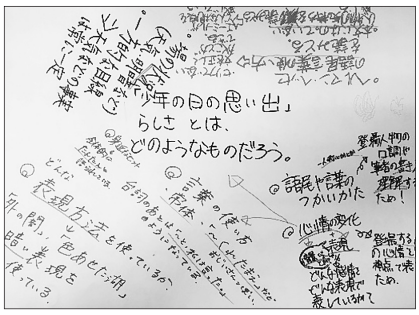
〔学習指導要領〕１年「Ｃ　読むこと」
イ　場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えること。
エ　文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。

３　研究とのかかわり（「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て）

既習事項を活用し、多様な情報を比較・関連付け、相互交流を通して自己評価を行う学習活動の展開

本題材では、語り手の視点が色濃く描写される文学的な文章を題材にしてリライトを行うという言語活動を通し、ねらいに迫る学習展開を構築した。題材の導入部で教師から欠点の多いリライト作品を提示することで、「『少年の日の思い出』らしくない」「ヘッセらしくない」という声が自然とわき上がり、「では、『少年の日の思い出』らしさとはどのようなものだろう」という課題意識を生徒自らが生むことにつながった。

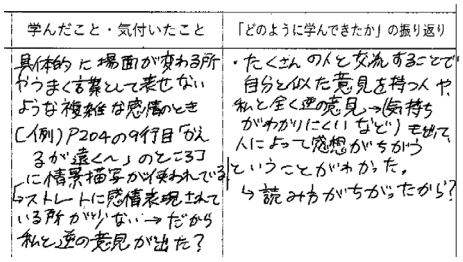
作品の特徴を捉えるための方法として、既習事項を振り返り、有効と思われる方法の一覧（「読み方リスト」）を作成した上で読み進める展開を設定した。「情景描写に注目すると心情の変化が分かったことがあったから」「人物の相関図を書くと登場人物同士の関係をうまくつかめたから」など、なぜそのような読み方が有効だと考えるのかを互いに説明した上で、他者の視点や自らの経験などと新たに出会う情報である教材文とを照らし合わせ、どのような読み方を選択、あるいは組み合わせると課題解決に結びつくのかを予想し、実際に読み進める中で必要に応じて修正を図りながら読みを深めていくことを「自律」に向かう視点とした。また、自分の読み方がどの程度有効であったか、あるいは考えを広げたり深めたりするためには更に何が必要かを検証する際、「共栄」に向かう視点として、自分の読み方がどのようなものであり、その結果として何が分かったかを模造紙に書き出しながら交流する展開を設定した。他者からの言葉で新たな発見を見いだしたり、相手の気付かない視点を指摘したりする活動を通して、文末の表現や情景描写の工夫や比喩などの表現技法、一つの事物に対する細かな修飾語の使い方といった、表現の特徴に



【気付いたことを自由に書き込み、説明し合う】

よって作品が形づくられていることなどの理解に結びついた。

更に、自分の考えを俯瞰し、どのような過程でそのような理解が得られたかに対して「省察」を活用することで、自分の考えはどのように広がったり深まったりしたのか、これまでの考えに何を組み合わせるとより一層有効性が増すかなどの視点に気付くとともに、どのような考え方が他の学習にも活用できそうかという見通しをもてたことも学習の記録シートから見取ることができた。



学んだこと・気付いたこと	「どのように学んできたか」の振り返り
具体的に場面が変わる所やうまく言葉として表せないような複雑な感情のとき (例)P204の9行目「かえるが遠くへ」のところに情景描写が使われている ↳ストレートに感情表現されている所がない→だから私と逆の意見が出た?	・たくさんの人と交流することで自分と似た意見を持つ人や、私と全く逆の意見→(気持ちがわかりにくい などで)もせて、人によって感想がちがう ということがわかった。 ↳読み方がちがったから?

【どのような思考の過程が新たな発見に結びついたかを記録する】

実践例２

１　題材名　「君は『最後の晩餐』を知っているか」光村図書２年

２　題材のねらい

①　語句や表現の工夫に着目して、筆者のものの見方や考え方を読み取る。

②　筆者の絵画の見方について、自分の知識や体験と関連づけて考えをまとめる。

〔学習指導要領〕２年「C　読むこと」
ア　文章全体と部分との関係に注意しながら、主張と例示との関係や登場人物の設定の仕方などを捉えること。
オ　文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。

３　研究とのかかわり（「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て）

明確な到達点を共有し語り合うことを通して、自己の考えを確立し深化させる学習活動の展開

本題材はレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画「最後の晩餐」の魅力を、様々な観点から分析している説明的文章である。題材の導入では、模造紙大の「最後の晩餐」を黒板に掲示し、美術科での学習を想起しながら、基礎知識を共有した。また、文章を読んだときに筆者の考えと比較ができるように、絵の第一印象を記録しておいた。更に、「最後の晩餐」に関わる謎を紹介し生徒の興味関心を高めてから本文を読んだ。一読後、分かったことを個人で整理し、筆者が「最後の晩餐」を「かっこいい」と評していることを確認した。そして、その「かっこいい」の理由を理解し、自分の言葉で説明し直す（プレゼンする）ことを言語活動として設定した。また、プレゼンの際にはＡ４の紙を６枚使用することを条件にした。６枚に必要な情報をどのように配置するかを考えることが、文章の構成や重要語句などに着目することにつながると考えたからである。最後に、教師が以前に学習した題材を用いて見本を示した。このように、文章に書かれている「かっこいい」理由を読み取るという学習のゴールを明確にし、更にはそこに到達するための手段としてのプレゼンの仕方を示したことで、生徒は見通しをもって活動に臨むことができた。そして、実際にプレゼンするために、既習事項を想起しながら自ら本文の読解に取り組む姿が見られた。

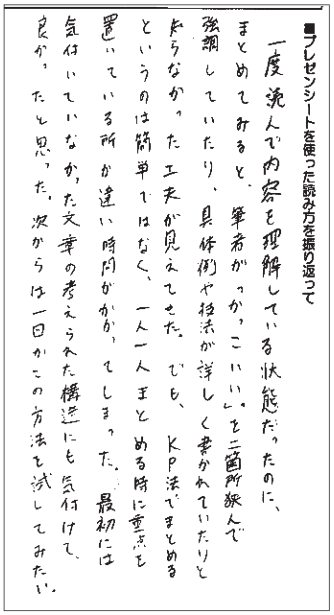
個人でプレゼン用のシートを下書きしたあとは、小グループ内で互いにプレゼンを披露し合った。ここでは、自分の考えを他者に語ることで、自分の読み取った内容や読み取り方を自覚することをねらった。そのために、互いの発表を聞く際には共通点や相違点を意識するように促した。そして、全員の発表が終わったあとには、なぜそのような形でシートをまとめたのかを交流しながら、「かっこいい」がより明確に伝わる形で、グループで一つにまとめることに

【自分の読み取りを他者に説明する】

した。その後、プレゼンシートをまとめるときに重視したことを振り返り学級で共有した。その結果、構成を意識すること、キーワードに着目すること、呼びかけとその答えをつなげていくこと、筆者の考えとその根拠となる事実を結びつけることなど、既習事項を踏まえた説明的文章の読み取り方を導き出すことができた。

続いて、グループでまとめたシートを使って、ワールド・カフェ方式で交流を行った。全員がテーブル・ホストを務めることで、グループで考えた内容を各自が再確認することができる。また、他のグループの発表を聞く際には、筆者が「かっこいい」を伝えるための工夫（表現）を探すという観点を示した。その結果、科学という視点からの分析、書かれた当時と現代との比較、絵や図の示し方、読者に語りかけるような書き方（題名を含む）、比喩などの表現技法など、様々な工夫に着目することができた。

題材の最後には、「プレゼン用のシートを使った読み方について」と「他者との交流の効果について」を観点とした振り返りをワークシートに記述した。そこからは、プレゼンするためにシートをまとめる過程で、一読しただけでは気づかなかった全体の構成や工夫された表現に、多くの生徒が気付くことができた様子を見取ることができた。また、他者との交流を通して読み取りを広げたり深めたりできたという記述も多数見られた。


■プレゼンシートを使った読み方を振り返って

一度読んで内容を理解している状態だったのに、まとめてみると、筆者が「かっこいい」を三箇所挙げて強調していたり、具体例や技法が詳しく書かれていたりとおもなかった工夫が見えてきた。でも、KP法でまとめるというのは簡単ではなく、一人一人まとめる時に重点を置いている所が違い時間がかかってしまった。最初には気付いていなかった文章の考えられた構造にも気付けて良かったと思った。次からは一回かこの方法を試してみたい。

【読み取り方を観点にして振り返る】

Ⅳ　実践から見えてきたこと

「自律」と「共栄」に向かう学びの過程を自覚することは、次の学びで活用しようとする意欲を生み出す。「この考え方は違う文章の時にも生かせそうだ」「次からはこの方法を試してみたい」という生徒の言葉は、授業における学びが、与えられたテキストのみに対する理解や一回性の表現活動に使用したスキルなどその場限りの知識や技能の習得に留まらないことを如実に表している。また、「自分一人で文章を新しい視点から読むのは厳しいので、他者ともっと交流したい」という言葉は、他者との学びに対してかけがえのない価値を見いだしていることを示している。他者との関わりから言葉を吟味し検証していく過程が学習展開上に位置づけられることで、言葉に対して能動的に関わり、互いに高め合おうとする意欲につながった。

一方、学習活動を展開する中で、活動自体がうまく処理できたかどうかに集中しがちであることも分かってきた。学習の目的は何か、活動を通して育成を図る言語能力は何かということを授業者と学習者の双方が共有し、どのような過程で育まれてきたかに対する「省察」を積み重ねることが必要である。更に、その結果として達成感をもって自ら「省察」の活用を能動的に選ぶようになることが重要だと考える。生徒が主体的に言葉と向き合い、試行錯誤しながらより良い表現を求める過程は、時には非常に多くの時間を必要とする。そのような過程を生徒自身が求めるような魅力のある、必然性のある、あるいは必要感のある学習課題の設定の工夫を絶えず行うとともに、単元構成や教材配置の見直しを継続し、他の教科や領域との関連や３年間の系統性を明らかにしながら、求める資質・能力を育成する学びを展開する実践を積み重ねていきたい。

Ⅴ　参考文献

・秋田喜代美『学びの心理学』左右社、2012年
・佐藤学、秋田喜代美、志水宏、小玉重夫、北村友人『教育の再定義』岩波書店、2016年
・冨山哲也『中学校国語科アクティブ・ラーニングガイドブック』明治図書、2016年